



阪神淡路大震災 精神科救護所 地域別の活動状況（神戸市東部）

【神戸市東灘区】¹⁴⁾¹⁷⁾

東灘区は、神戸市の最東部の区で、北側の六甲山麓は3つの大学を抱える文教地区、南部は工業地域で、沖合には六甲アイランドという人工島を有する。東西に阪急、JR、阪神の鉄道3線と、国道2号と43号、そして阪神高速道路が横切っている。震災の被害は、神戸市の中では最も激しく、全壊家屋は実に4割、死者も約1,500人に達した。

震災前より区内には、6カ所の精神科診療所と、精神科外来を有する総合病院が3カ所あったが、精神科入院病床はなかった。このうち3カ所の診療所は、震災当日中に診療を再開し、ひとつの診療所では、医師の自宅が被災して一家で診療所に避難したために、24

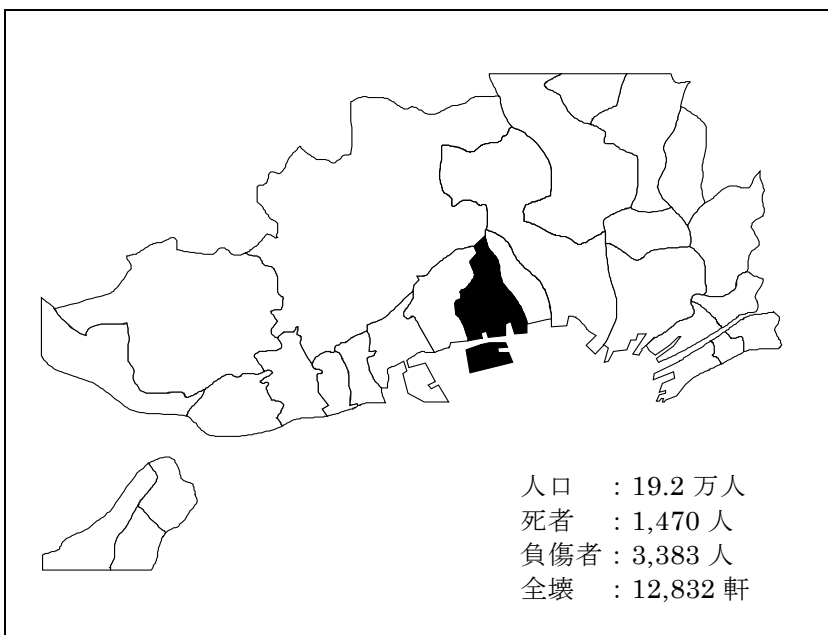
時間対応をする結果となった。また1月末には区内の病院のひとつが、被災地外の関連病院から精神科医の常駐派遣を受けて、新たに精神科外来診療を開始した。

地震発生から精神科教護所の開設までの間にも、救援活動は開始されており、例えば区内在住の精神科医や、加古川からオートバイで診療所の薬を持って駆けつけた医師の活動が記録されている。また、精神科救護所設置決定から実際の開設までの間には、県立病院や神戸大学病院の医師が、保健所を拠点にしてニーズに対応した。

1月25日に精神科救護所が正式に活動を開始した。精神科医療チームの派遣は、大阪市・奈良県・広島市・岐阜県・大阪医大・慶応大学などより受けた。精神科救護所の立ち上げにあたった大阪市立大学チームでは、昼間は常時2名の精神科医を確保し、1人は往診・巡回にあたり、もう1人は専ら保健所内で相談・診療業務に当たり、いずれか1名はそのまま宿直して夜間対応に備えた。

全期間を通じて自治体等から派遣された医師とともに、ボランティアとして参加した医師が共同で活動した。特に、大阪府下の2名の開業医が、2月中旬から救護所終結まで継続して救護所活動を支援した。また、大阪MSW協会、日本PSW協会のケースワーカーたちと各自治体派遣の保健婦が2名一組の巡回チームを組み、救護所を拠点に活動した。

精神保健センターに夜間診療応需チームがおかれたのを期に、2月16日より精神科医1名体制となった。それにあわせて、各自治体および各医大派遣のチームとボランティアとして参加した医師で巡回チームを2チーム編成し、避難所を巡回した。うち数カ所の大規模避難所では、精神科医を週間スケジュールに従って決まった曜日に半日滞在させた。3月以降、ケアの対象は避難所総体から各個人へと移っていった。一般医療の救護チームおよび他地域の精神科救護所の多くが3月末に終結したのに1ヶ月遅れて、本救護所体は4月末日に終結した。



救護所チームは、実際の相談・診療業務の他にも、救援ボランティアへのケア、マスコミ対応、被災者に対してアルコール問題などに関する知識の啓蒙などを行った。それまでに保健所の精神保健活動に参加していたユーザーたちについても、避難所巡回の折には、その生活の現状把握に努めた。一方で、多くのボランティアの「カウンセラー」が区内に多く出入りしていたが、その活動の実態を把握しコーディネートする者がいなかったため、県臨床心理士会に依頼し、カウンセラーのネットワークが結成された。

【神戸市灘区】¹⁷⁾

灘区は神戸市の沿海部の東寄りに位置する。六甲山や臨海部の工業地帯、ターミナルや幹線道路沿いに散在する商店街を除けば、ほとんどが住宅地である。鉄道が3本、高速道路が1本、一般幹線道路が3本東西方向に区内を貫いており、交通の便には恵まれていた。ところが震災により区内のJR東海道線の六甲道駅が全壊し、続きの高架部分も顕著に破壊され、その復旧と再開はJR線の中でも最後となる震災の約3ヶ月後であった。また他の私鉄2線は復旧がさらに遅れ半年以上を要した。上記JR六甲道駅周辺を始めとして、区内の被災は激しく死者も多数発生した。

震災前の精神医療資源として

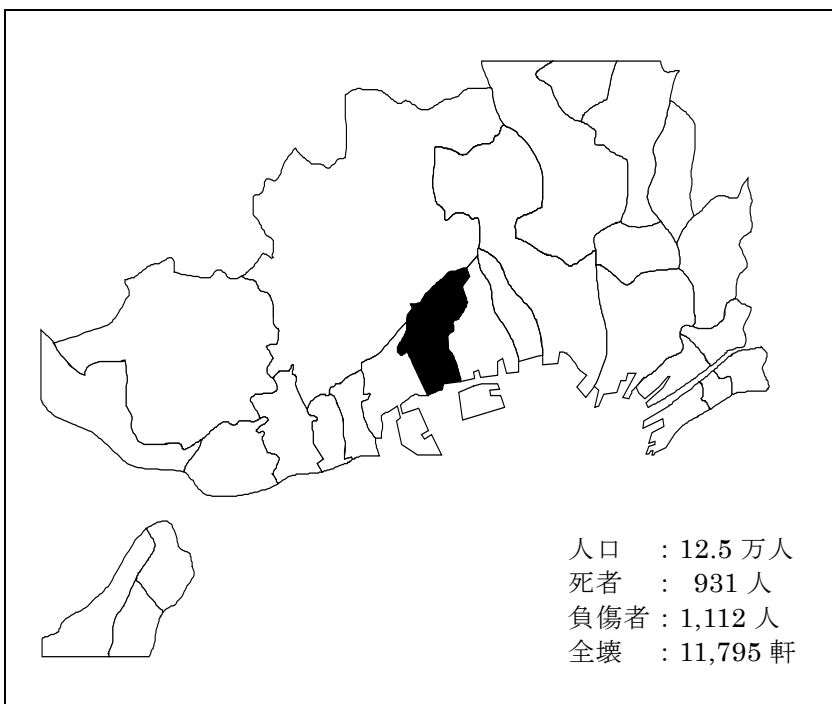
は、神経科を持つ総合病院精神科が1、診療所が2と少なく、精神科の医療ニーズは区外への通院によってカバーされていた。この区内の医療機関の再開は比較的早かったが、元来少ない資源であり役割は限られていた。

灘保健所は区の中央部の区民ホールにおかれていたが、新築間もなかったことが災いして、スプリンクラーが正常に作動し所内が水浸しになっていた。早く登庁してきた職員が水を汲み出し、まず遺体を安置するための部屋を準備した。確保した20畳ほどの部屋には入りきれない数の遺体が搬入され、その処置に追われた。棺桶作りに始まり、ドライアイスの確保、そして毎日の交換などが、その後1ヶ月ぐらい続いた。

これと平行して区内の巡回を行った。当初は身体的な救急医療ニーズが多く、その対処に忙殺されたが、震災後1週目にある避難所の管理者から「訳のわからんことを言っている人がいる。」との通報が寄せられた。保健所の嘱託医であった区内の精神科診療所の医師が介入し、被災地外の精神病院へ入院させた。その後、あたかも「降って湧いたように」事例が急増し、保健所のPSWと嘱託医だけでは対応が難しくなったため、救援チームを受け入れることとなった。

灘区には3府県のチームが入った。まず1月24日から府立病院と精神保健センターを主体とする大阪府チームが派遣された。同チームは、当初は神戸市北区に宿泊し通っていたが、保健所PSWの要請で保健所に駐在するようになった。この体制が敷かれてから、当初から連日泊まり込み、夜間の対応に追われていた保健所PSWの役割が肩代わりされるようになった。同チームは2チーム制で構成され、2泊3日のローテーションで派遣（精神科医2名、PSW1名、看護1名）された。このうち1チームが保健所に常駐し、他チームが保健所を起点に区内の中央部を巡回した。

次に静岡県チームが（精神科医、PSW、看護各1名）、1月31日から2月13日まで区西部にある王子スポーツセンターに派遣された。さらに、2月2日から3月末まで区東部の成徳小学校に埼玉県チーム（精神科医、PSW、保健婦各1名）が常駐した。このように区内をいくつかのブロック



に分け各救援チームが対応したが、全ての情報は保健所に集約され、地元の PSW および灘区に在住していた神戸の他区 PSW がコーディネートした。その他に PSW 協会から、2月7日から26日まで1名が派遣され、地元 PSW の援助をした。

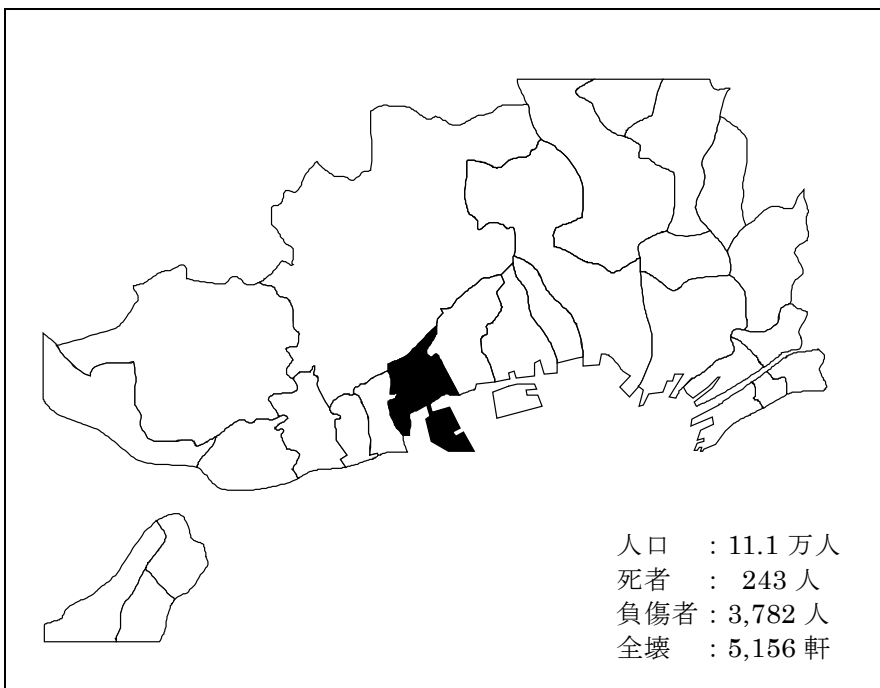
これら以外にいくつかのボランティア医師、ボランティア団体の活動が伝えられているが、独自の活動で連絡会に参加しなかったため正確な活動状況は把握されていない。

扱ったケースの多くは、これまで保健所の把握していないケースであり、精神病圏の患者の急性増悪などが当初は多かった。また、第1回目の義援金の交付があった2月中旬頃、アルコール関連の問題が多発した時期があった。その後3月に入ってからニーズが減り、保健所からの避難所への巡回相談を中止し、避難所から要請があった場合に対応することとした。

埼玉県チームは3月中旬で精神科医は引き上げ、その後3月末までは PSW のみが派遣された。また、大阪府チームは3月末で大幅に体制を縮小したものの5月末まで、週1回来所し支援を続けた。

【神戸市中央区】 11)17)

神戸市の中央区は神戸の交通の要となる三宮や市役所、県庁を管内に持ち、三宮や元町の繁華街や、その周辺のインナーシティの住宅街、それに人工島のポートアイランドなどから構成されている。医療機関については神戸市立中央市民病院や神戸大学医学部附属病院という基幹病院をはじめとして総合病院の数が多い。また、精神科、神経科の外来機能を持つ病院は7(うち精神科単科が2)、精神科神経科の診療所が10と医療機関の数も多い。中央保健所は三宮のターミナル近くの区役所ビルの5階にあり、他の神戸市の保健所と同様2名の精神保健相談員がいた。



地震による被害は大きく、数多くのビルが倒壊し市役所、区役所なども甚大な被害を受けた。また交通の面でも、区内を通る電車や地下鉄のうち、早期に開通したのは神戸の内陸部と結ぶ北神急行(地下鉄)が新神戸駅まで通じたただけであり、東西の交通は約3カ月の間大きく阻害された。医療機関については、大病院には直接の大きな被害はなかったものの、最大の医療機関である中央市民病院は人工島ポートアイランドにあったため、交通アクセスが大きく阻害され役割を果たすことができなかった。精神科・神経科の診療所も大きな被害を受け、全壊5、半壊2と報告されている。また多くの診療所は再開に日数を要し、再開後の機能も著しく制限されていた。

中央保健所には1月21日より大阪府の医療チームが派遣されたが、第2陣とともに、被災地に於ける精神保健活動のための向精神薬が届けられた。その場で精神科診療のニーズが検討され、1月22日より3日間、県立精神保健センターと県立光風病院の医師が診療にあたった。24日より厚生省の要請に応じて派遣された和歌山県と滋賀県の精神科チームが、保健所における診療を開始した。さらに27日より上筒井小学校に常駐する千葉県医療チームに精神科医が加わり、1月25日からは大阪府より PSW が1名保健所に派遣された。31日より山の手小学校の東邦大学チームにも精神科が加わった。2月4日より滋賀県チームが県派遣の医療チームの滞在する宮本小学校に移動し、同7日より保健所に愛知県チームが加わった。これらのチームは保健所ないし避難所のある学校を拠点として診療活動を主とし、要請があれば往診、巡回を行うという形の活動であった。

また、この他に1月29日より24時間電話相談を始めた神戸精療クリニックのボランティアチーム、神戸大学病院精神科病棟に滞在した九州大学などのチーム、および2月20日より区内の診療所

に拠点をおいた日本精神科診療所協会の支援センターなどが、避難所の巡回を行っていた。しかし、保健所の救護所との連携には欠けていた。また日本てんかん協会が依頼して区東部の県立福祉センターで診療が行われたが、これは地域の精神保健活動とはまったく接触がなかった。

最も多くのチームが活動したのは2月中旬であるが、2月後半には相談ケースは減少している。各チームの活動終了は東邦大学が2月19日、千葉県が2月28日、滋賀県が3月1日、和歌山県が同13日、愛知県が同26日であった。その後は診療ニーズは少なかったが、精神保健の支援として3月26日～29日は公立豊岡病院チームや地元精神科医が入り、4月より石川県の応援派遣を受けた。